

西中国 地域の 後期中生代 — 古第三紀 火山 岩類(案内者:村上允英・今岡照喜)

この巡検は、西中国地域における大規模な白亜紀珪長質火山岩層の代表例である匹見・阿武両層群と古第三紀の田万川陥没体の見学を目的として、4月4、5日に1泊2日の日程で行われた。

午前8時40分、湯田温泉を出発したバスは国道9号線を一路北上し徳佐へ向かった。出発前日の悪天気とはうってかわった好天気で、巡検中は晴天のため少し汗ばむほどであった。一行はまず阿東町蔵田で阿武層群e層の流紋岩溶岩を見学。この地点の流紋岩は流理構造が明瞭で溶岩ドームを形成しており、オパール脈を伴っている。溶岩ドームが形成時に地表に露出していたか、あるいは地表に達することなく地下に潜在したか、オパール脈の貫入の時期やその成因をめぐって論議が行われた。次に国道315号線を北西に向かい、阿武層群の代表的岩相である凝灰岩、凝灰質砂岩・頁岩などを順次上位から下位にむけて観察した。途中、山ローの秀峰といわれる十種ヶ峰^{とくさかみね}を遠望し、その特異な地質(山頂部にのみ“古生層”と関門層群が露出し、中腹以下にはこれをおおって阿武層群が広く分布する)をめぐって議論に花が咲いた。津和野の国民宿舎で昼食をすませ、SL機関車と桜を背景にして記念撮影。午後は青野山・雲井峰・野坂山などの安山岩円頂丘を車窓より眺めつつ、バスは匹見層群の見学地点である柿ノ木村へ向かった。匹見層群の最下部流紋岩層・下部石英安山岩層を見学した後、鹿足層群と匹見層群との境界部にみられる貫入性凝灰角礫岩を観察した。ここでは角礫の礫種、マトリックスの構成物などについて詳細に検討され、各自の観察結果にもとづき、その生成機構についての活発な意見の交換が行われた。予定より1時間ほど早く津和野に帰着、参加者の要望とバスの運転手の好意で、山陰の小京都津和野の観光となった。流暢なガイドの案内で、西周・森鷗外の旧居、手すき和紙製作の実演を見学後、明治から大正にかけての日本地質学会の大御所小藤文次郎先生の生誕の地を訪問。殿町から大橋にかけて鯉の泳ぐ流れにそい、三三五五散策、国民宿舎「青野山荘」に戻った。夕食は諏訪先生の音頭で乾盃し、9時過ぎまで盃を重ねながら歓談が続いた。

明けて2日目は田万川陥没体を見学した。まず須佐町鈴ノ川で環状深成岩体の一部である花崗閃緑岩を観察、次に第2の見学地点である唐音の河床でデイサイト質凝灰岩を見学した。ここではその堆積環境をめぐって議論があり、水中堆積物との意見が多かった。次に陥没体西縁の基盤岩との境界部にある角礫岩帯を見学したが、陥没時の崖錐堆積物とみる見解が多かった。また、陥没のステージなどについても討論された。安山岩・流紋岩などの火山岩層を見学後、田万川町小川において火山岩を貫く斑状の花崗岩を見学、サンプリングをして昼食をとった。午後は陥没体の東縁部において溶結構造を示すデイサイト質凝灰岩と、陥没体と基盤岩との境の角礫岩を見学した。ここでも角礫岩については崖錐性堆積物との意見が多かった。この後、バスは川登・横田を経由して9号線を南下し、15時過ぎ無事小郡駅に到着し解散した。

最後に2日間にわたり有意義な討論をしていただいた参加者の方々に心から御礼申し上げる。参加者20名。

(村上允英・今岡照喜記)